慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヘンダースン , クォント共著 小宮隆太郎訳 現代経済学 : 価格分析の理論
Sub Title	
Author	福岡, 正夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.1 (1962. 1) ,p.91(91)-
JaLC DOI	10.14991/001.19620101-0091
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620101-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る。つまり彼は、フランス「人民」をみていたので、独自な階級としてのプロレタリアートをみることができず、したがって、その国際的連帯性を認めることもできなかったのだと思われる。

さて最後に、ルイ・ブランが、どんなタイプの社会主義者であったか、考えてみよう。第七章「革命家なき革命」においては、くりかえし、ブランや、その他の左派が、いかにそのエネルギーの源を、パリの労働者に求めていたかが強調されている。大革命の時と違って、彼らは、地方がパリについてこないであろうことをよく知り、かつ怖れていた。大革命の力の一つだった隷農は、今や小土地所有者になっているからである。(p. 71) では、パリの労働者はどういう階層によって構成されていたのだろうか。この点について著者は本格的な研究をしていないようである。だが、こういうことはいえないだろうか。ブランが頼った労働者、民衆は、近代的な組織労働者ではなかった、と。そういう意味で、彼は古い型の政治指導者の、おそらくは最後の一人だったのではないだろうか。大革命の時と同じように、パリ民衆の人気を唯一つの基盤として、決して組織の上ではなく、名声の上にまたがったリーダーだったと思われる。第十章「幻滅」にもそのことはうかがわれる。彼は下層中産階級も、労働者もひっくるめた「人民」(p. 116)、その政治的モッブの上にのみ乗っていたのである。第十一章「小さな巨人の没落」は、いかにブランが、自分を社会主義運動の人格化したものと考えていたかをよく浮きぼりにしている。彼は社会主義それ自体であり、彼の成功は社会主義の成功であり、彼の亡命はそのままジャコバン社会主義の、運動としての敗北なのであった。(p. 140—2)

ルイ・ブランに関しては、長らく新しいモノグラフが途絶えていたと思われるが、当時の新聞をも十分使った、本格的な研究が現われたことはよろこばしい。単なる伝記以上のもの、ということができよう。

新刊紹介

ヘンダースン、クォント共著 小宮隆太郎訳 『現代経済学』 ——価格分析の理論——

本書は、James M. Henderson and Richard E. Quandt, *Microeconomic Theory: A Mathematical Approach*, McGraw-Hill, 1958. の邦訳である。原著の標題である微視的経済理論というのは、よく知られているように消費者や生産者の主体的行動から構成される市場の均衡の理論、一口にいって正統的な価格の理論のことであるが、そのような分析領域は巨視的所得理論が発展した今日においても依然としてきわめて重要なものであり、むしろ後者に対するケインズの功績が歴史のパースペクティブの中に正しく位置づけられるにつれて、ますますその基礎的枢要性を再認識されつつあるように思われる。その意味で、「価格分析から所得分析へ」という一時わが国でも流行したスローガンほどその後の理論発展のコースを皮相に誤り印象づけるものはないのであって、われわれはサムエルソンとともに、所得分析に補強された「新古典的綜合の立場」が今日の支配的共通地盤であることを認めねばならないのである。このことはハーバードやオックスフォードなどのカリキュラムを見るならば、疑う余地のない明確な事実である。

さてこうした観点からして、本書の公刊そしてその邦訳書のわが国における公刊は、価格理論の秀れた中級教科書の資格において右の共通地盤の教課の上に多大の効用を発揮するであろうと考えられる。ここで中級と形容する所以は、一応幾何図形による説明はマスターしたが解析による説明は不可解という読者層に対して、本書はこの上なく懇切で信頼するに足る手引きを与えているからである。一例をあげていうならば、消費者均衡理論で2財のとき無差別曲線が原点に対して凸という叙述なら分るが、同じことを一般にn財のとき、

$$\begin{array}{c|c} 0 & u_1 \quad u_2 \\ \hline u_1 & u_{11} \quad u_{12} \\ u_2 & u_{21} \quad u_{22} \end{array} \quad \begin{array}{c} \vee 0 \\ \cdots\cdots \\ (-1)^n \\ \cdots\cdots \end{array} \quad \begin{array}{c|c} 0 & u_1 \quad u_2 \cdots u_n \\ \hline u_1 & u_{11} \quad u_{12} \cdots u_{1n} \\ u_2 & u_{21} \quad u_{22} \cdots u_{2n} \\ \cdots & \cdots\cdots\cdots\cdots \\ u_n & u_{n1} \quad u_{n2} \cdots u_{nn} \end{array} \quad \begin{array}{c} \\ \\ \vee 0 \\ \\ \\ \end{array}$$

と書かれるとどうも分らないというたぐいの読者のために、本書は周到な橋渡しを用意してくれているのである。

そのように、例えばヒックスの『価値と資本』の本文は分るがその重要な数学付録は分らないという人のために、またポールディングの『経済分析』は分るがサムエルソンの『経済分析の基礎』は分らないという人のために、当然あってしかるべきであった踏石を提供してくれること、それが本書のもっている最もユニークな意義であるといってよい。近著中推薦に値する佳作である。(創文社・A5・四一二頁・八〇〇円) —福岡正夫—

* * *

篠原三代平著 『日本経済の成長と循環』

本書は、著者篠原氏が比較的最近発表された日本経済の実証分析を内容とする諸論文を、書名の示すところにしたがって集録したものである。全体としての一貫性も十分保つよう整理されており、いわば氏のこれまでの研究の仮決算とみることができよう。

本書の序文で著者は、「あたかも自然科学